<ポストモダン>以降
－「見える世界」から「見えない世界」へ－

早澤正人*
mh03108830@gmail.com

<目次>

1.「見えない世界」が苦手な日本人
2. 80年代以降
3. ＜ポストモダン＞と「2ちゃんねる」
4. ＜ポストモダン＞における言語的危機
5. オートメーション時代へ
6. 可能性としてのディストピア
7. むすびに

主題語: ポストモダン(Postmodernism)、ポスト真実(Posttruth)、第四持産業革命(The fourth industrial revolution)、オートメーション(Automation)、人工知能(AI)

1.「見えない世界」が苦手な日本人

現在、仁川大学で韓国の学生を相手に日本の文学や文化を教えている。赴任して五年にもなるが、海外に住んでいるうち日本の良いところや悪いところをある程度客観的に眺めることが出来るようになった。

では、そのようにして発見された日本の特徴のなかで、「これは特に問題にした方がよいのではないか?」と思えるものを一つ挙げろというなら何かというと、それは日本人が「見えないものに弱い」という事になる。

そう、日本人は見えないものに弱い。──たとえば、クレジットカードなどがそれである。私もそうなのであるが、現金が「見えない」形でやり取りされていると、何やら落ち着かない気分になる。そこでカードを持っているにも関わらず、わざわざキャッシュで買い物をする。しかし、日本では私のように現金で買い物をする者が多いが、韓国やアメリカなどではほとんどカードである。

それから、インターネットに弱いというのもある。特に「サイバー攻撃」や「ウィルス攻撃」

* 仁川大学校 日語教育科 助教授

のような「見えないもの」に対して、日本人はあまりにも脆弱すぎる気がする。少し前にビットコインがハッカーに盗まれたというニュースもあったが、それだけでなく日本企業の情報流出なども依然として多い。──これはやはり「見えないものが苦手」なためであろう。このように、日本人(私を含む)はサイバー空間のような「見えない世界」に対して、あまりに脆い一面を備えている。

さて、筆者がこのことを問題にするのは他でもない。──将来はこの「見えない世界」こそが産業の中心になってくるからである。具体的にいうと、IoTのように世界中のモノをインターネットでつなぐ世界が、近い将来やってくる。自動車もテレビも冷蔵庫もエアコンも、スマートフォンなどに同期させて操作する。──そうなった時「見えない世界」が苦手な日本人はどれだけ対応できるのだろうか。

もっとも、このような変化は第四次産業革命などともよばれ、韓国ではすでに対応を急いでいるところもあるのだが、日本ではその準備が遅れているようにみえる。たとえば、前述したキャッシュレスの普及にしても、韓国96%、アメリカ46%、中国60%なのに対し、日本ではわずか19%という統計(※小数点以下、切り捨て)があり[1)]、若年層のコンピューター保有率も、先進国のなかで低くなっている[2)]。日本がこの分野で遅れを取っていることは明らかなのだが、一般の日本人がこうした問題について、どの程度の危機感を抱いているのか甚だ疑問である。

M･マクルーハンが述べるとおり、新しいメディアの登場は人間の感覚の配合を変えるだけでなく、社会構造のあり方を大きく変えるものである[3)]。ITやAIといった「見えない世界」の台頭も、長らく<ポストモダン>などとされてきた日本の社会構造を大きく変容させ、その次の時代の到来を垣間見させるものともなる。その意味でも新たなメディアの対応にもっと注目するべきであろう。

本稿はそうした問題意識のもと、日本における──特に80年代以降の<ポストモダン>の展開について俯瞰的な視点から整理しつつ、現代の日本が抱える問題や課題について検証し、次いでその延長として近い将来に来るであろう<ポストモダン>以降の世界について推察を加えるものである。今の日本がどういう状況にあって、これから何をすべきなのか──

---

1) 野村総合研究所(2018)「キャッシュレス化推進に向けた国内外の状況」によれば、2016年のキャッシュレス比率は、「韓国96.4%」「イギリス68.7%」「オーストラリア59.1%」「シンガポール58.8%」などと紹介されている。http://www.soumu.go.jp/main_content/000545437.pdf　検索日(2019年5月7日)

2) 日本内閣府(2013)「わが国と諸外国の若者の意識に関する調査」検索日(2019年5月7日)
http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h28/minkan_katsudou/pdf-index.html

3) M･マクルーハン(1987)『メディア論』(栗原裕･河本仲聖訳、みすず書房)
原書は、Marshall McLuan, UNDERSTANDING MEDIA The Extensions of Man 1964

そのような鳥観図を示すことが本稿の目的である。

2. 80年代以降

まず、本稿のキーワードとなる<ポストモダン>の定義から始めることにしよう。

<ポストモダン>──直訳すれば「後近代」である。この用語は、元々フランスの哲学者、J-F・リオタールが、その著書のなかで用いたことで、広く知られるようになったものである。リオタールによれば、<近代(モダン)>という時代は「人間性と社会とは、理性と学問」によって進歩していくという「歴史の大きな物語」が信じられていた時代をいうが、<ポストモダン>は、そのような「大きな物語」の解体した時代──情報過多と価値観の多様性によって、社会秩序の中心が失われモザイク化された時代の事であるという[4)]。

もっとも、その詳細な定義や時期などについては、人によって区分が異なってこようが[5)]、筆者としては、日本における<ポストモダン>は──それが本格的に社会に表面化してきたのは──80年代頃からではないかと考える[6)]。

---

4) リオタールは、「ポストモダン」について次のように述べている。
科学と物語とは、元来、絶えざる葛藤にある。科学の側の判断基準に照らせば、物語の大部分は単なる寓話に　　過ぎないことになる。ところが、科学が単に有用な規則性を言表することにとどまらず、真なるものを探求するものでもある限りは、科学はみずからのゲーム規則を正当化しなければならない。すなわち、科学はみずからのステータスを正当化する言説を必要とし、その言説は哲学という名で呼ばれてきた。このメタ言説がはっきりとした仕方でなんらかの大きな物語──《精神》の弁証法、意味の解釈学、理性的人間あるいは労働者としての主体の解放、富の発展──に依拠しているとすれば、みずからの正当化のためにそうした物語に準拠する科学を、われわれは《モダン》と呼ぶことにする。(中略)正義もまた、真理と全く同じ視覚で、大きな物語に準拠するようになる。極度の単純化を懼れずに言えば、《ポスト・モダン》とは、まずなによりも、こうしたメタ物語に対する不信感だと言えるだろう。-J-F・リオタール『ポスト・モダンの条件』(小林康夫訳、水声社、1986年6月)、pp.7-8

5) たとえば、東浩紀(2001)『動物化するポストモダン』(講談社現代新書)は、「ポストモダンとは七〇年代以降の文化的世界を漠然と指す言葉」(傍点引用者)と規定し、次のように述べている。
「近代とは大きな物語で支配された時代だった。それに対してポストモダンでは、大きな物語があちこちで機能不全を起こし、社会全体のまとまりが急速に弱体化する。日本ではその弱体化は、高度経済成長と「政治の季節」が終わり、石油ショックと連合赤軍を経た七〇年代に加速した。(p.44)」
こうした記述をみると、東は日本の<ポスト・モダン>を、大体70年代頃から表面化してきていると捉えているようである。ただ、ポスト・モダンが表面化してくる時期などについては、論者の問題意識などによって異なってくるものでもある。

6) <ポスト・モダン>といっても、それは<近代>に内包されていたものでもあり、次第に表面化してきたものであろう。本稿は社会学者の宮台真司や、小説家の村上龍などが、90年代後半に盛んに論じていた社会分析の理解を踏まえて、80年代以降からの<ポスト・モダン>状況を問題化することにした。

たとえば、村上龍などによると、そもそも明治維新と共に始まった<近代>というのは「富国強兵」や「経済成長」のように、国家が目標を持ち、国民がその目標の達成に向けて団結していた時代のことであるという。そのような時代では、国民が目標に向けて団結しているので秩序もまた安定していた。日本の進むべき方向性は、比較的はっきりしていたし、国民もまた進歩や成長を実感することが出来た。つまり「大きな物語」を生きていたのである。

しかし、そのような日本の<近代>が崩れてきたのが80年代になる。具体的にいうと、80年頃に1ドルが200円を切ったあたりで日本の<近代>は終焉を迎えた。<近代>が終わるというのは「日本という国は十分豊かになった」ということであり、「日本という国は何もすることがないくらい成熟した」ということ――つまり、国家的な目標が達成されたということである。

もっとも、こうした「目標の達成」は、同時に「目標の喪失」でもあった。実際、日本人は<近代>が終わったとされる80年頃から、次第にバラバラになっていき、社会にも無気力や空しさが蔓延するようになっていった。そこで、ニートやフリーターが増え、援助交際やカルト宗教が流行った。これは<近代>が終焉した虚無感から起こったものであるという。さらに国民がバラバラになることで、秩序もまた解体されていった。「２ちゃんねる」7)やインターネットが流行り、色々な価値観が相対化され、何が正しくて何が間違っているのか、よくわからなくなっていった。

村上龍はこうした時代状況について、90年代の社会的雰囲気が「寂しさ」に覆われていることを指摘している8)。

> 現代をおおう寂しさは、過去のどの時代にも存在しなかった。近代化以前には、近代化達成による喪失感などというものがあるわけがないから、わたしたちは、現代の問題を、過去に学ぶことができないということになる。今の子供たちが抱いている寂しさをもって生きた日本人はこれまで有史以来登場しない(略)近代化が終わったのに誰もそのことをアナウンスしないし、個人的な価値観の創出も始まっていない。だから誰も混乱しないし、目標を失って寂しい人間が増えている。女子高生の援助交際も、子供たちのいじめも、この国の人間たちが抱えている寂しさが原因で発生したことだ。―― 村上龍(1998)『寂しい国の殺人』(シングルカット社)p.58、p.64

---

7) 「2ちゃんねる」とは、日本最大の電子掲示板。2017年10月1日から「5ちゃんねん」に名称が変更された。

8) 宮台真司(1997)『世紀末の作法』(メディアファクトリー)は、80年代頃に「近代が成熟し、途上期にありえた輝かしいロマンが失われていく」事を指摘し、そこから「ロマンなき社会への適応」を問題化している。「近代の成熟」という問題意識は村上だけのものではなく、この時期の論壇のトピックでもあった、というのが筆者の理解である。

ともあれ、社会全体が国家的目標を失い、寂しさが蔓延し、脱中心化されたモザイクのように秩序が解体していく時代──このように「大きな物語」の喪失した時代を、本稿は日本の<ポストモダン>(＝後近代)とするのである。

3. <ポストモダン>と「2ちゃんねる」

前章では、現代日本の直面している状況を<近代 / ポストモダン>という言葉で説明した。日本の<近代>は、国民が国家的目標にむかって団結していた時代をいうが、それは80年頃、1ドルが200円を切った頃に終焉を迎えたということ──そして<近代>の終焉によって、社会は寂しさと無気力が蔓延し、秩序が解体する<ポストモダン>という時代に移っていくことを指摘した。

もっとも、こうした<近代>から<ポストモダン>へのシフトは、その後<テレビ>から<インターネット>への主要メディアの移行によって、さらに表面化していく事になる。──そもそも日本で90年代頃まで隆盛を極めていた<テレビ>は、単に娯楽を提供するものだけではなく、中央集権的な機能も持っていた。80年代から90年代、日本人はテレビをみることで似たような情報を共有し、似たような価値を共有していたし、そのような意味での秩序は保たれていた。

しかし、そうした秩序の崩れてきたのが、90年代からゼロ年代にかけて──特に「2ちゃんねる」などに代表されるインターネットが普及してきてからであろう。実際、そこではあらゆるものが相対化された。価値や基準も批判され、脱中心化されていった。

たとえば、匿名の個人がインターネットで政治家やメディアの発言を批判したりするのがそれである。──もちろん、単に個人が相対化するだけではない。そのような発言をすると、今度は別の個人が登場してきて前者の発言を相対化し、それをまた別の個人が登場してきて相対化したりする。

具体的にいうと「２ちゃんねる」などで「○○が正しい」とＡ君がいえば、Ｂ君が登場してきて「Ａ君は馬鹿だ。○○が正しい」という。するとＣ君が登場してきて「Ａ君もＢ君も馬鹿だ。○○が正しい」という。さらにＡ君がまた出てきて「Ｂ君もＣ君も馬鹿だ。最初の発言は、私の釣り(嘘)だ。」と言う。いわば、相対化の相対化の相対化の……という形で、様々な意見が交響しあい、反響しあい、事の真偽がわからなくなっていく。──このようにインターネットでは、嘘か本当か、よくわからない発言をする人たちが、互いの意見を否定し

たり、賛同したりしながら、不毛な対話を繰り返している。

そうした多声的(ポリフォニック)な情報との戯れは、まさに<ポストモダン>的な快楽といえるのかもしれない。しかし、これは現在の停滞した時代状況を突破していくものを生み出すことなく、価値の解体を加速させている。

> 時代状況は高度成長が終わった80年代くらいからほとんど変化していない。抑圧感や閉塞感だけが強くなって、雇用も非常に不安定で、よほどのバカでない限り将来に対する不安がある。不安が極端に強くなれば、精神がダメージを受け、何事にも無気力だったり突発的な犯罪に走ったりする人間が増える。──村上龍(2012)『櫻の樹の下には瓦礫が埋まっている』(KKベストセラーズ)pp.48-49

> 『世の中が急速に変化していて、何がどうなっているのかよくわからない』と多くの人がそう思っていて、その認識は間違っていない。たとえば、再稼働させたがっている原発が本当に安全なのか、よくわからないし、リスクも特定できないし、万が一の避難計画も、高齢者や、体が不自由な人に対しては心もとない。それでは原発を全部止めてしまえばどうなるのか、これもよくわからない。(略)さまざまなことが正確にわからないという状況では不安が生まれる。たいていの人は不安に耐えるのが得意ではないので、たとえ「下らない」と言われようと、占いや健康や食べもののほうに興味が向く。──村上龍(2015)『ラスト・ワルツ』(KKベストセラーズ)pp.131-133

4. <ポストモダン>における言語的危機

これまで80年代以降の日本社会の特徴を<ポストモダン>をキーワードとして、俯瞰的に整理してきた。前章では<ポストモダン>は、様々な人の価値観によって社会的秩序や価値観が相対化されるという事──そして「２ちゃんねる」はそうした<ポストモダン>的な世界を象徴しているという事を確認した。

ところで、見てきたような「２ちゃんねる」における言語状況というものを鑑みると、現代の日本では、言語というものの「底が抜けている」のではないかとも思えてくる。──「底が抜ける」というのは、つまり言語を保証する信頼(あるいは、権威)が失墜しかけているという事である。この点について少し補足しておこう。

そもそも、言語というものは貨幣と同じで信頼のうえに成り立っているといわれる。千

円札が千円の値打ちをもつのは日本銀行への信頼に基づいているが、当然のことながら日本銀行への信頼がなくなれば、千円札などというものはただの紙きれになる。──言語というのもそれと同じ。他人の話を聞いて、その話を事実と認定するのは、相手への信頼に基づいている。つまり「嘘つきではない」という信用があるから、我々は相手の話を事実と認識するのである。従って、もし相手が「嘘つき」であり信用のない人物なら、その人の話の情報としての価値はほとんどなくなるのである[9]。

もっとも、人間というのは疑い出せばキリがないものでもある。すべての人間が嘘つきだと思うと──たとえば「「話」を疑う自分」を疑う自分」を疑う自分」を疑う…」といった具合に、自意識過剰のなかで懐疑が無限にループし、収拾がつかなくなってしまうだろう。(ハイパーインフレのように、言葉の価値が暴落する)

そして、今の時代における<言語的危機>というのは、このような言語の信頼性が失われ、懐疑と不信が国民の間に蔓延しつつあるという事態なのである(＝言葉の底が抜けてきている)。それは主にマスコミ不信から始まっている。我々は新聞や雑誌のいう事を以前ほど信用しなくなっているが、このような状況を先ほどの「２ちゃんねる」のようなインターネットの書き込みが拍車をかける。──たとえば、新聞や雑誌に何か記事が掲載されると「いや、それは間違いだ」とか「陰謀だ」という書き込みをする人が必ず出てくる。

こういう状況が発展していけば、何が正しくて何が間違っているのか？何を信じたらいいのか？どうすればいいのか？懐疑の無限ループが起こって、全く訳がわからなくなってしまうだろう。実際、最近は「ポスト真実」という言葉もある[10]。これは「真実よりも感情を優先して判断する」「事実に基づかない主張がまかり通る」という意味で、イギリス発祥だそうであるが、筆者にいわせれば、これも<ポスト・モダン>の一側面に与えられた異名であって、意味としては<ポスト・モダン>とほぼ同じもの(あるいは、その延長)にあたるものなのである。

---

9) 拙著(2018)『芥川龍之介論─初期テクストの構造分析─』鼎書房、p.282 参照

10) 「ポスト真実」については、日比嘉高(2017)『『ポスト真実』の時代』(祥伝社)が、以下のように説明している。キャンペーンの中で大小さまざまな嘘を並べたドナルド・トランプ氏がアメリカ大統領となった。イギリスのＥＵ離脱(ブレグジット。Brexit＝Britain＋exitの造語)の国民投票でも、虚偽の数字がばらまかれた。日本でも、首相が福島第一原発の事故は完全にコントロールされていると胸を張ったり、防衛大臣が南スーダンの治安が落ち着いていると述べたり、あるはずの行政文書がないと強弁されたりしている。このような事実に基づかない主張がまかり通る政治状況は、「ポスト真実の政治 post-truth　politics」と呼ばれる。p.3

5. オートメーション時代へ

80年代以降の日本の状況を俯瞰してきた。見てきたように<ポストモダン>という時代は、価値観が相対化され、「言葉の底が抜けていく」時代であり、秩序が脱中心化し、モザイク化していく時代の事でもある。──いったい、人間の認識というものが言葉と結びついたものであり、原則的に人間は「言葉を超えたもの」について思考することが出来ない、とすると「言葉の底が抜けていく」現代の<ポストモダン>状況は、我々人間の思考の限界を思わせるものがあり、閉塞や停滞を思わせるものもある。

ところが、こうした状況が今変わりつつある。──冒頭でも述べた通り、これから世界はおそらく「見える世界」から「見えない世界」へと、その重心を移していくことになる。この「見える世界」というのは、まさに我々の住む「物質の世界」──つまり、家があって、車があって、道路があって…といった物理的世界の事であるが、これは一方で「見えない世界」のテクノロジーに支えられている。──「見えない世界」とは、IT等のサイバー空間の事である。

そして、今後はこの「見える世界」と「見えない世界」の間の主従関係が徐々に逆転していくというのが、筆者の見立てである。実際、その兆候は既にあらわれているだろう。ビットコインしかり、SNSしかり、ネットゲームしかり。──これら広大なIT空間は、ビッグデータの収集と顧客へのサービス機能を、今後さらに充実させながら、オートメーション機能(自動-機能)を拡張させつつ、現実を浸食していくだろう。──IoTというのもその一例で、世界中のモノがネットで結ばれる事で、私たちは余計な事を調べたり、考えたりする事に時間をとられなくなるという。これを肯定的に捉えるならば、世界は今よりももっと快適で利便性の高いものを目指して進んでいくという事になる。

そして、注意したいのは「メディアの世界」が、このようなものに変化していくとするなら、我々が今直面している<ポストモダン>における<言語的危機>の状況──人の<認識の限界>も克服されていくかもしれないという事である。

では、何が認識＝言葉をこえていくのかというと、それはある種の「身体性」というものになろう。思うにメディアは、今後どこか我々の身体に近い機能を備えたものになっていくのではないか。──なぜなら身体というのも、ある意味、オートメーション機能(自動-機能)を有したもので、煩雑なことを全て自動的に処理してくれるものだからである。たとえば、私たちは食事をとるが、その後の処理──すなわち、胃の中で消化したり、腸のなかで養分を吸収したり、といった事については関与しない。それは私たちの身体が自動的に

やってくれる。髪の毛や爪が伸びたりするのも同様。これらはすべて身体のオートメーション機能である。

また、現在、IT分野の一つともいえるAIの世界では、医者よりも正確に患者の病名を言い当てる事も出来るというが、こうした機能を敷衍化させていけば、先に述べた「<ポストモダン>における言語的危機」状況―前章で見てきたような、様々な人達による無数の認識(言葉)のモザイクも、コンピューターの出す最適解によって、一瞬で吹き飛ぶかもしれない[11]。たとえば、現在、領土がどうとか、憲法がどうとか、経済がどうとか、様々な人達が様々に議論している事柄も、もしかすると、コンピューターに必要な条件を入力すれば、AIが最適解を出して解決してしまうという事が起こるかもしれない[12]。

もちろん、筆者はこの分野については門外漢であって、具体的にどのようなことが起こるのか、正確なところは不明であり、保証も出来ない[13]。しかし、AIの発達によって人間の言葉(思考)の限界が突破されていくという可能性は否定できるものではないだろう。

ともあれ、今後の課題となるのは、こうしたITの世界をどれだけ馴致させるか、身体のように飼いならすことが出来るか、私たちが(メディア・リテラシーなど必要とせずに)自在に操れるようにするか、という事ではないだろうか。そのような課題をクリアすれば、私たちは様々な煩雑な事柄を(自分の身体が処理してくれるように)、コンピューターに処理してもらえるようになる。そして、それは私たちの日常のほとんどが、無意識によって処理されていることに似てくるのではないだろうか。

---

11) もっとも、フェイクニュースがなくなるというわけではない。しかし、報道へのファクトチェックにAIの機能が加わることで、フェイクニュースの氾濫が抑止されるなどの事はあるかもしれない。実際、そうした取り組みは既に行われている。立岩陽一郎・揚井人文(2018)『ファクトチェックとは何か』(岩波ブックレット)の次のような記事が参照になる。

米国では、『ワシントン・ポスト』紙で市民が担っている役割をAI(人工知能)が担うという動きも始まっています。これは米国の大学が中心になって開発したソフトで、AIを駆使してフェイクニュースを見つけ出すというものです。「クレームバスター」と呼ばれるそのソフトは、ファクトチェックの対象となるような政治家の言説やネット上の情報を、AIを使って抽出するというものです。p.47

12) 日本経済新聞社編(2018)『AI　20145』(日本経済新聞出版社)では、「米国人研究者ベン・ゲーツェル氏」が「AI政治家」の開発組織を立ち上げたことが紹介されており、政治的解決をAIに委ねる可能性が摸索されている。(p.104)

13) 落合陽一(2018)『デジタルネイチャー』(PLANET)も、「近代をいかにして乗り越えるか」という問題は、<言語>の制約」を脱しない限り不可能とし、「言語を介在させずに現象を直接処理するシステム」の実現可能性や、IoT以降に来るであろう「デジタルネイチャー」の世界についてふれている(p.18)。落合はAIがフェイクニュースの問題を解決する事はありえない(p.112)とするが、次世代における「ポジティブなフェイク」に新たな可能性をみているようである

6. 可能性としてのディストピア

ところで――前章で見てきたように、筆者は今後多くのものがオートメーション化されていくと考えているが――AIに関連した書を読んでみると、AIの抱える問題や好ましくない未来像についてふれているものも少なくない。そのことはディストピア化する未来像とも交差してこよう。ここでは、そうした問題についても、簡単に紹介しておきたい。

さて、AIの抱える問題として最もよく挙げられるのが、コンピューターに関する権利や道徳、あるいは我々の人権問題になる。周知の通り、AIの精度を高めるためには、ビッグデータを充実させる必要がある。IoTなどを通じて収集した豊富な情報をもとに、AIが分析し最適解を出していくというのが、現在の基本的な方法とされているからである。

しかし、そのためには我々のプライバシーに関する情報をコンピューターに譲り渡す必要がある。そこで情報収集のため、私達の私生活(プライベート)がコンピューターによって管理される恐れが出てくる[14)]。その場合、我々は利便性や快適性と引き換えに、徹底的にコントロールされ、監視される存在になってしまうかもしれない。(具体的にいえば、我々の買い物の傾向や、収入、税金の納め方、軽犯罪などにいたるまで、すべてデータ化され、コンピューターに支配されてしまうという事である)

また、AIのブラックボックス化という問題もある。AIは全能な存在ではない。これはあくまでビッグデータをもとにして最適解を導き出すプログラムに過ぎない。そして AI の性能を高めるためには、そのような膨大な量の情報を必要とするわけであるが、だとすると、将来AIの下した最適解が正しいのか、それとも間違っているのか――人間では、判断することが出来なくなってしまうという問題も発生してくる。つまり、情報が膨大になりすぎて、コンピューターが間違っているのか、人間の能力ではチェック出来なくなり、誤りを修正出来なくなるという恐れが出てくるという事である[15)]。

他にもコンピューター技術を戦争に悪用する恐れ(無人戦闘機や無人空母の開発など[16)])や、大量失業者の問題[17)]など、この分野は今なお多くの問題を抱えている。

そのような問題もあるので、しばらくは人間とAIとが協働しながら「両者がどのような形

---

14) 樋口晋也・城塚音也(2017)『AI人工知能』東洋経済、p.26、p.234
15) 文献は注11と同じ、p.203
16) 文献は注11に同じ(p.230)、ほか注9(p.69)にも類似の指摘がある。
17) 新井紀子(2018)『AI　VS　教科書が読めない子供たち』(東洋経済)では、将来AIによる失業者が増え、「AI恐慌」とでも呼ぶべき世界的な大恐慌が来るかもしれないと予想している。(p.273)

で共存するのか」という方法が模索されていくだろうと考えるが、コンピューターの発達は人間の思考を上回るスピードで進んでおり、またAIには国力と結びつくような性格も備わっている以上、長期的にみれば、やはり人間の方がコンピューターに依存するような形になっていく――人間がオートメーション的世界に従属するような形になっていく。――それはやむを得ない趨勢ではないかと思われる。

7. むすびに

以上、本稿は80年代以降の日本の<ポストモダン>状況を俯瞰的に整理しつつ、今後起こりうる可能性として、オートメーション時代を想定した。もっとも――繰り返し強調しておくが、筆者はITやAIについては全くの門外漢であって、上記のことも想像で補っている部分もある[18]。しかし、程度の差はあっても「見える世界」から「見えない世界」へ――「自意識過剰(情報過多)の世界」から「無意識(自動＝オートメーション)の世界」へという、この流れ自体は大きく変わることはないだろう――あるいは、この流れに逆らうことはできないだろう。

実際、マクルーハンも、その著書(1987)『メディア論』(栗原裕・河本仲聖訳　みすず書房)において、外爆発で拡張していったメディアが「電気の時代」に内爆発へと転換し、世界は「地球村」になるだろうと述べている。

> 西欧世界は、三〇〇〇年にわたり、機械化し細分化する科学技術を用いて「外爆発(explosion)を続けてきたが、それを終えたいま、「内爆発」(implosion)を起こしている。機械の時代に、われわれはその身体を無限に拡張していた。現在、一世紀以上にわたる電気技術を経たあと、われわれはその中枢神経組織自体を地球規模で拡張してしまって、わが地球にかんするかぎり、空間も時間もなくなってしまった。(中略)われわれの文明は「中心-周縁」という構造をもち、専門化し細分化しているが、それがいま突然にあらゆる機械化された部分を有機的全体に瞬間的に再編成するという経験をしている。これが地球村という新しい世界なのだ。マンフォードが『歴史のなかの都市』で説明しているように、この村は人間の諸機能を社会および制度に拡張することを遂げている。加速と都市群とはこれらの機能を相互に分離させ、さらに専門家した形

18) もっとも、AIやITの専門家が、正確に将来を予測出来ているとも思えない。たとえば「シンギュラリティー」という一事をもっても、これが起こるのか、起こらないのか――見解が分かれてしまっている。逆にいうと、そのような重要な事すら予測できていないという事でもあろう。

態にするのに役立っただけであった。電気の時代には、過去二〇〇〇年の西欧世界と切っても切れない「中心-周縁」の構造のような低次の連動装置を維持できない。──マクルーハン前掲書、p.3

こうしたマクルーハンの論が、アメリカで発表されたのは1964年であるが[19]、今も新鮮味を失うものではないだろう。

また、マクルーハンは、メディアというものが本来人間の「身体」を拡張したものであるとも論じている。たとえば「馬車」というメディアは人間の「足」の機能を拡張したものであるが、こうしたメディアが登場すると、我々の身体や社会の組成そのものが、無意識のうちに変容するという[20]。

こうした文脈を筆者の考えに引き寄せていえば、現在の「見える世界」は、まだ私達の身体が「視覚」に重心をおいた形で構成されている事を表していようが、第四次産業革命によって、ITやAIなどの「見えない世界」によるオートメーション化(無意識化)が進行すると、それに伴って我々の身体も──たとえば、「触覚」が優位になるような仕方に再編されていくかもしれない。いわば、<ポストモダン>という脱中心化されたモザイクのような世界で(複数の人間の声が無数に反響する)自意識の支配する「視覚」中心的な時代から、<ポストモダン以降>という、AIやITが無意識のような形で支配する「触覚」中心的な時代へ──今後、世界は移行していくかもしれないという事である。

ともあれ、これまでの日本人の功績は、基本的に「見える世界」──自動車とか、テレビとか、オーディオとかが中心であったが、今後は早急にその発想を転換させていかないと、世界でのプレゼンスを失うことになるだろう。このまま、将来「見えない世界」に比重が

---

19) 原書は、注3参照

20) マクルーハンは、メディアというものが、身体機能の拡張したものであり、これを使用することによって、人間の身体感覚が変容し、新たなメディア(身体拡張)を生み出すという<メディア / 人間>の相互作用について述べている。

技術という形態でわれわれ自身を拡張したものを見ること、使うこと、知覚することは、不可避的にそれを抱擁することになる。ラジオを聞くこと、印刷されたページを読むことは、われわれ自身の拡張したものを自身のシステムのなかに受容することであり、そのあとに自動的に生ずる「閉鎖」あるいは知覚の置換を経験することである。日常使用している自分自身の技術をたえず抱擁しつづけると、我々は人間自身のこういうイメージにかんして意識下で自覚と麻痺を起こすナルキッソスの役割を演じないわけにいかなくなってしまう。たえず技術を抱擁しつづけると、われわれは自動制御装置としてそれらに自身を関係づけることになる。（中略）生理的には、技術(すなわち自身の多様に拡張した身体)を正常に使用している人間は、たえずそれによって変更を受け、また逆に、たえず自身の技術に変更を加える方法を見出す。ちょうどハチが植物の世界の生殖器であるように、人間は機械の世界のいわば生殖器となり、つねに新しい形式をその世界に受胎させ、進化させる。機械の世界は人間の愛に応えて、人間の願望と欲求を促進する。p.48

移っていった時、日本人はイノベーションを起こせなくなる。(実際、GOOGLE、NAVER、YOUTUBE、AMAZON、FACEBOOK、LINE、TIKTOKなど、全て海外の発明である。)今の日本は、懐古的で後ろ向きな思考にとらわれすぎている嫌いがあるが、今は過去よりも未来に目を向けて、来るべき第四次産業革命に備えつつ、AIとどのように共生する社会を目指すか考えなければならない。今の日本は、そのような時期にある。

【参考文献】

新井紀子(2018)『AI VS 教科書が読めない子供たち』東洋経済、p.273
落合陽一(2018)『デジタルネイチャー』PLANET、p.18、p.112
日本経済新聞社編(2018)『AI 20145』日本経済新聞出版社、p.69、p.104
小林康夫訳(1986)『ポスト・モダンの条件』水声社、pp.7-8
早澤正人(2018)『芥川龍之介論―』鼎書房、p.282
東浩紀(2001)『動物化するポストモダン』講談社現代新書、p.44
日比嘉高・津田大介(2017)『『ポスト真実』の時代』祥伝社、p.3
立岩陽一郎・揚井人文(2018)「ファクトチェックとは何か」岩波ブックレット、p.47
樋口晋也・城塚音也(2017)『AI人工知能』東洋経済、p.26、p.203、p.234
宮台真司(1997)『世紀末の作法』メディアファクトリー
村上龍(1998)『寂しい国の殺人』シングルカット社、p.58、p.64
_____(2012)『櫻の樹の下には瓦礫が埋まっている』KKベストセラーズ、pp.48-49
_____(2015)『ラスト・ワルツ』KKベストセラーズ、pp.131-133
栗原裕・河本仲聖訳(1987)『メディア論』みすず書房
Jean-François Lyotard(1979) La condition postmoderne
Marshall McLuan(1964) UNDERSTANDING MEDIA The Extensions of Man
野村総合研究所(2018)「キャッシュレス化推進に向けた国内外の状況」検索日(2019年5月7日)
(http://www.soumu.go.jp/main_content/000545437.pdf)
日本内閣府(2013)「わが国と諸外国の若者の意識に関する調査」検索日(2019年5月7日)
(http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h28/minkan_katsudou/pdf-index.html)

논문투고일 : 2019년 03월 25일
심사개시일 : 2019년 04월 16일
1차 수정일 : 2019년 05월 14일
2차 수정일 : 2019년 05월 16일
게재확정일 : 2019년 05월 17일

〈要旨〉

＜ポストモダン＞以降
－「見える世界」から「見えない世界」へ－

早澤正人

本稿は、日本の80年代以降における＜ポスト･モダン＞状況を分析しつつ、来るべき第四次産業革命後の＜ポスト･モダン以降＞の時代まで射程に入れて考察を加えたものである。日本における＜近代(モダン)＞とは、国民が「富国強兵」「経済成長」など、共通の目標をもっていた時代をいうが、それは80年頃に１ドルが200円を切った段階で達成される。こうした目標の達成は、日本の近代国家としての「成熟」を意味するが、それは同時に国家的な目標の「喪失」でもあった。国家的な目標の喪失は、国民をバラバラにし、それともに様々な秩序や価値も相対化され、解体されてしまった。たとえば、日本のネット掲示板「２ちゃんねる」などをみると、様々な人が嘘か本当か分からない意見を主張しあい、真実がモザイクのように脱中心化されてしまっている。このことは、近年「ポスト真実」などという言葉にみられるような、国際的なフェイクニュースの氾濫とも関係している。もっとも、そうした＜ポスト･モダン＞状況下における価値の相対化や混乱は、今後AIやITによる「オートメーション」化によって克服されていくきっかけを得るかもしれない。膨大な情報は、AIなどによって最適解が出され、解決されるかもしれないからである。

After Postmodernism
－From the “Visible World” to the “Invisible World”－

Hayasawa, Masato

In this paper, I investigate the postmodernism in Japan, considering both its status from the 1980s to the present and what may be referred to as a coming post- postmodernism rooted in an anticipated fourth industrial revolution. In Japan, a key feature of “modernity” was the inculcation of a common purpose among the citizenry, such as building a “Rich Country, Strong Army,” as the slogan put it, or economic growth, this goal was more or less achieved in the 1980s when 200 Yen surpassed the value of one US dollar. The achievement of this goal can be understood as the “maturation” of Japan into a so-called modern state. However, at the same time, it also meant the loss of a national goal. This resulted in the fracturing of the people into different groups and a related process whereby various values and methods of organization were relativized or dismantled. For example, if you look at the Japanese online bulletin board “2channel,” you can see that the truth has been decentralized like a mosaic, with various people arguing whether certain facts are true. This is related to the flood of international fake news embodied by the new word “post-truth.” However, the relativistic values and confusion associated with a Post-modern condition may be overcome in the future by AI and IT realizing “automation.” This is because a large amount of information may be evaluated by AI or similar programs to obtain optimal solutions.